

岩波の月刊誌『世界』は、毎月二つの特集を組んでいるが、8月号は「安倍政治の決算」の特集一つにし、15人が論考を寄せ、多角的に論じている。その中に、北海道大学教授の櫻井義秀氏が「統一教会問題 宗教リテラシーと歴史認識の貧困がもたらしたもの」と題して、寄稿している。安倍晋三元首相が、統一教会に人生を奪われたと言う山上徹也容疑者の銃撃を受け、亡くなる惨劇が起こった。その時から、統一教会問題がクローズアップされた。80年代、統一教会の靈感商法と過度な献金がマスコミを賑わし、教会も関心を持ち、私も幾度か、関係集会に参加した。安倍元首相の銃撃事件を契機に、表に出てこなかった政治家と統一教会は選挙がらみで、ずぶずぶの関係であることが明らかにされた。また、統一教会は反共、家族問題で、自民党政策に深く関わっていることが露呈した。

櫻井氏は「統一教会の何が問題なのか。靈感商法、過度の献金、6000人を超す韓国在住の日本人女性信者、現在も数え上げればきりが無い」と言い、だから、「統一教会の教義や信仰のありかた、信者の勧誘・教化システム、無許可の養子斡旋、宗教二世の苦境、そして、教団の構造にまで踏み込んだ問題の指摘が本来必要である」と指摘する。しかし、この言い方には、統一教会はもちろん、識者の中に「信教の自由」を侵害すると考える人がいる。国家が宗教に介入するのは、戦前の宗教団体法や現代中国の宗教事務条例のように、国民生活を管理することであるから、賛成できない。社会問題化する宗教を批判し、行動の変容を促していくのは宗教者と宗教研究者が、その役割を担うべきである。官でなく、民でねばり強くやるしかない。「信教の自由」を掲げれば批判も介入もできないほど、思考停止に陥らないように、柔軟な宗教リテラシー（知識・能力）を社会に広げていくべきだ。何を信じていても自由だが、その中身を建設的に批判する自由はあると言う。

櫻井氏は、「宗教には高いレベルで規範意識や倫理性が求められる。この認識が日本社会に不足している。そのために鰯の頭も信心からと言ってみたり、不可思議・超常的なことがらを信じ込んだりするのが宗教だという皮相な見方が根強い。そうではない」と言い、「人間・社会・世界の関連性を有意義に構成した思考の営みが宗教文化である」と定義する。私も、宗教は民の営みであり、人を苦しめる人間否定に向かうのではなく、生の有意義性を確認し合うのが、宗教本来の務めであると信じている。

統一教会の教祖文鮮明や韓国の教団幹部たちは根深い日本植民地支配に対する「恨（ハン）」を持っている。彼らの「恨」が日本人信者に贖罪を求め、多額な献金を当然とし、とりわけ、韓国人男性と日本人女性を結婚させ、夫に仕えさせようとする差別的なジェンダーを形成している。彼らは、その構図を「アダム国家の韓国のアダムたる男性にエバ国家のエバである日本人女性が侍る構図」と豪語している。このような自分勝手な解釈は聖書から生じることはない。日本は朝鮮半島を植民地支配していた時の非人道的政策の道義的責任は消し去ることはできない。安倍晋三元首相は「美しい日本」とか「世界に冠たる日本」などと言うが、日本をエバ国家と軽蔑する統一教会の支援者になっている皮肉が不思議でならない。櫻井氏は「この皮肉こそ、政治家の歴史認識の貧困を示している」と言う。私は、この矛盾を自民党にどう考えているのかを聞いてみたい。

櫻井氏は最後に「統一教会・カルト問題の解決や状況の改善を政府に期待し過ぎては危うい。中長期的には市民個人がカルト的勧誘や要求に敢然と対応できるような宗教リテラシーと歴史的認識を持てるように学校教育や社会教育をやるしかない」と結んでいる。私たちキリスト教徒の責任は重いということである。